

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12613
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：24652150
研究課題名(和文) ロブリエール家文書を取り巻く世界 フランス貴族所領経営と領主文書の謎を解く

研究課題名(英文) Socio-Economic Analysis of Archives of the Marquisate of Laubrieres

研究代表者
大月 康弘 (OTSUKI, Yasuhiro)

一橋大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：70223873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：『ロブリエール家文書』(Archives of Laubrieres, Marquisate of Franklin MS.17)(一橋大学社会科学古典資料センター所蔵。以下『文書』)を分析し、14世紀後半～18世紀末のフランス所領経営の実態解明に努めた。『文書』が作成された動機と、記載内容の選択の意味、伝来の経路等を、当該社会の国家権力/公権力との関係性の中で検証した。時代状況における『文書』の社会的・政治的性格、国家権力(公権力)との関係、伝えられる記事内容の特徴を考察した。
特設サイトを公開し、『文書』の全画像データとともに概要を伝える論文を掲載した。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have investigated the Archives of Laubrieres, Marquisate of Franklin MS.17, which are preserved in Hitotsubashi University. These documents belong in the years of 1372-1780. Our research was focused, firstly, in analyzing their contents, secondly, in understanding the relationship between those documents and the real political and economic situation of France, thirdly, in reconstructing the management of estates by Laubrieres Family from the second half of 14th to the end of 18th centuries.
We have set the website for the Archives of Laubrieres, with some remarks on them. We believe they will help to promote further investigations.

研究分野：西洋史

キーワード：古文書 フランス 中世 近世 所領 明細帳 荘園 ロブリエール

1. 研究開始当初の背景

一橋大学の社会科学古典資料センターに収蔵される『ロブリエール家文書』(Archives of Laubrieres, Marquisate of, 1372-1780, Franklin MS.17.) (以下、『文書』)は、フランスの貴族ロブリエール侯爵家の歴代の文書であり、1372年から1780年にかけての、ラ・ソレイなる封地・領地に関する文書と、プソンの城主権に関わる文書から成る。ラ・ソレイはフランス中西部に位置するアンジュー地方の村落であり、プソンは同じ地方の城区である。本プロジェクトでは、『文書』を素材に、中世末期から近世にかけてのフランスの地方社会の実態に迫るとともに、文書伝来の謎を解きながら、日本、ビザンツにおける同時期の文書との形式的・内容的比較研究を行った。

2. 研究の目的

(1)本プロジェクトは、一義的目標を、『文書』がフランス社会で占めた位相(社会的、経済的、また政治的な意味で)の究明に置いた。

『文書』は旧蔵者であるアメリカの古書商バート・フランクリンの蔵書を三井グループの援助で一橋大学が獲得した際に日本に入ってきたものである。全27巻(うち2巻は羊皮紙に記され、残りは紙に記されている)で、総ページ数は折込み紙片等も1頁としてカウントして5,434頁に及ぶ。管見の限り、領主裁判の記録、サンス税など臣民への賦課の取立て台帳、封地の移転・管理に関する台帳、領主布告の記録など、封建領主の所領管理に関わる第一次史料であり、若干の欠落があるが、中世後期からアンシアン＝レジーム末期までの所領管理の記録群として、注目に値する。

本プロジェクトは、この『文書』作成の動機と、記載内容の選択の意味、伝来の経路などを、当該社会の国家権力/公権力との関係性の中で検証した。『文書』は、上記の項目を含んで多彩な記事内容を示しているから、これを分析するためには、『文書』そのものに内在しながら、これを取り巻く社会、環境との関係性のなかでテキストを読み解かなければならなかった。つまり、同文書が置かれた政治的・社会的状況を、フランス王権ほかの公権力との関係において分析しなければならなかった。本プロジェクトは、この課題を、まずは文書学、歴史学の手続きによって実践した。これが第一の目標であった。

(2)しかし、分析されるべき『文書』内容は、外形面ともに、当該社会(の歴史的文脈)に置いてこそ理解されるはずであった。そのコンテキスト分析があつてはじめて、『文書』の伝える「歴史上の真実」が浮かび上がると思量された。すなわち、フランス貴族のイエ経営の記録である『文書』を、単にフランス国家秩序のなかに意味付けるだけでなく、他の国家秩序との比較においてフランス国家秩序の変遷をも見据えるかたちで、考察する

必要があつた。『文書』テキストに内在した分析を行うとともに、フランス社会の国制との関係性という、いわばマクロの観察枠組に、『文書』の作成動機や記事内容の選択の意味を位置づける必要があつた。

本プロジェクトの特徴は、この大きな座標軸を、日本、ビザンツという2つの比較軸によって担保することにあつた。そのために、わが国「戦国期」の毛利家文書、またビザンツ帝国における所領経営文書との、形式面、内容面での比較分析を試みた。

日本中世は、ある部分で西欧中世と同様の政治・経済構造を有した、と論じられてきた。その点では、これまでも理念的な比較史的検討が行われてはいた。ただ、具体的な文書事例に即した研究はほとんど存在しない。他方、社会経済史分野における西欧中世とビザンツとの比較は、事実上失敗しており、新たな視座の構築も放置されたままである。ビザンツ帝国が集権的な財政主義国家fiscalitéであり、西欧中世や日本中世とはまったく異質な国家だったことに起因する、とわれわれは見ている。本プロジェクトは、まさにこの「国家の異質性」を前提に『文書』研究を行った。

(3)ある所領の経営主体が、いかなる戦略をもって国家権力/公権力との関係のなかにイエ経済の現実と行く末を見ていたか。この点を問うことで、以上の目的はある程度達成できると予想された。本研究によって、『文書』が伝える人びとの関係性がヴィヴィッドに浮かび上がるとともに、その関係性が「フランス」という枠組を超えて、世界史的な並行現象との比較の座標軸の上に、個性的な光を放って位置付けられることになろう、と期待された。

これまでの西洋史学では、英独仏の比較近代化論をはじめ、これら三国における比較中世封建制論(農村構造論等)を軸に展開してきた。その成果は大きな学問的意義を有するが、「フランス」や「ドイツ」といった、のちに確立する近代国家を自明の参照枠としてきた点で「近代主義的」な問題設定であった。ところが、『文書』は、そのような「近代フランス的」な政治機構、社会機構が成立する以前の記録である。本プロジェクトは、この認識に立って、ビザンツ、日本との同種文書事例との比較考察を行うなかで、近代主義的な「前近代」経済史学の作法への方法論的批判を行いつつ、新しい史料研究の視座の構築をめざした。これが、本研究における最大の、第三の目標であった。

3. 研究の方法

(1)『文書』が記録する14世紀後半～18世紀のフランス所領経営の実態を分析し、文書が後世に伝来した経路を解明しつつ、日本における同種文書との形式的・内容的比較研究を行う。『文書』が置かれた時代状況を考察することで、国家(公権力)権力と『文書』

との関係、『文書』が伝える記事内容の特徴を検証する。わが国における同種の文書代表例である「毛利家文書」（戦国期から江戸初期）、またビザンツ帝国における所領関連文書との比較を通じて、『文書』の世界史的位相について解析する。これらが本研究の方法である。

（２）しかしそのために必要なのはいずれにせよ『文書』の解読である。そしてこの種の史料は素材や製本自体歴史的特徴を備えたものであるから、慎重な取り扱いが求められる。さらに共同研究の便宜のためには、適切な手段で複製を作る必要があった。そこで本格的な解読に取り掛かる前段として、『文書』全体のデジタル撮影を行い、研究チーム内で史料データを共有することとした。

（３）この史料データをもとに、『文書』の外形的分析、また解読作業に着手し、この初動的調査活動によって、まず『文書』の外形的、内容的概要を総覧した。その際、主に『文書』作成の動機をさぐりながら、記載内容の選択の意味などについて検討した。それは、当該社会の国家権力／公権力との関係性の中でこそ意味をもつことから、フランス王国史との関係性のなかで分析を進めた。『文書』の内容が伝える地域の状況を、『文書』が作成され始めた初期段階から始めて確認することができた。

分析されるべき『文書』内容は、外形面とともに、当該社会（の歴史的文脈）に置いてこそ理解されるものである。コンテキスト分析があつてはじめて、『文書』の伝える「歴史上の真実」が浮かび上がる。そのために本研究では、わが国「戦国期」の毛利家文書、またビザンツ帝国における所領経営文書との、形式面、内容面での比較分析を試みた。

（４）最後に、『文書』の外形面のデータを悉皆的に整理して、一橋大学社会科学古典資料センターのウェブサイトで公開して、本文書の存在を国内外に情報発信することとした。

4. 研究成果

（１）『文書』の画像データ化

平成24年度および25年度に、研究チーム内での史料データの共有のために『文書』の画像データ化の作業を分担して推進した。これによってテキスト情報へのアクセス可能性が確保された。

『文書』の物理的特徴として、全体に資料ノド付近まで書き込みがある頁、ノドに書き込み部が巻き込まれている頁があり、また羊皮紙資料の2巻については、羊皮紙の小紙片を重ねながら綴じ込む形式の製本であることから、一部の羊皮紙に強い波打ちが見られた。『文書』画像のデジタル撮影にあたっては、資料への負担を軽減する撮影台を使用し、また18世紀のものと思われる歴史的製本に手を加えることはせず、可能な範囲で撮影するにとどめた。撮影は原本に対し光学解像度280dpiにて行い、TIFF形式の画像データに変

換するとともに、取り回しを考慮して巻ごとに画像解像度260dpiのPDFファイルにまとめた。

（２）内容分析

本研究の一義的目標は、『文書』がフランス社会で占めた位相（社会的、経済的、また政治的な意味で）の究明であつた。しかし、実際に『文書』を見ればわかるように、能筆とはいえ手書きの文書であり、一枚の紙葉に書体とインクの濃さが異なるテキストが混在していることも少なくない。複数人が異なる時期に記入したものと推測されるが、このような文書を執筆者の確定を含めて系統立てて分析することはそれ自体困難な作業であろう。

さらに内容分析も詳細に行う必要がある。たとえばラ・ソレイの地代帳を分析すれば、該当する期間の人的結合のありようや集住と耕地の空間配置の変遷を明らかに出来、農村世界の再現が可能になると思われるが、そのためには総体的かつ精緻な分析が必要である。

本プロジェクトでは、本格的分析作業を行う準備として、『文書』の外形的分析、解読作業に要請された限りで、記事内容に関する類型化を行った。その結果、記事を解析し、内容の類型化、数量化に向けて本格的分析を行うための基礎がかなりの程度でかたち作られたと思路する。

（３）情報の発信

平成25年度までの2年間で『文書』外形面のデータはほぼ悉皆的に整理し終え、本文書の存在を国内外に情報発信する準備が整つたので、最終年度にあたる平成26年度に『文書』の画像データの全体を一橋大学社会科学古典資料センターのウェブサイトから公開した。公開にあたっては、単に画像を掲載するにとどめず、内容的概要を伝える論文を分担執筆して掲載した。これによって『文書』の存在を国内外に知らしめるとともに、『文書』の研究が今後さらなる発展を遂げるための礎を築くことができたのは本プロジェクトの大きな成果であつた。

（４）今後の展望

最後に、本プロジェクトが挑戦的萌芽研究であることに鑑みて、『文書』研究の今後の展望について述べておきたい。

なによりもまず分析の継続である。当たり前のことだが、『文書』の全容解明はけっして3年間の研究で実現できることではなく、相当の時間とエネルギーを要する。根気強く、地道に分析を継続する必要がある。

さらに現地調査の必要性である。本プロジェクトでは財源の制約のために現地調査を断念し、手元の資料に基づいて地勢の推定を行った。しかし、正確な理解のためには、現地に赴いて『文書』が伝える地域の特性を確認し、歴史的な変遷を検証する作業が必須であろう。『文書』テキスト内容は、当該地域の地勢、地味、住民の個性に規定されているからである。

一橋大学が所蔵している『文書』にとどま

らず、ロブリエール家の所領経営に関する文書は今日まで相当量が伝来し、現地の公文書館に保管されていると推測される。『文書』の総体的理解のためには、関連する資料を悉皆的に収集し、合わせて分析することが要請される。

本プロジェクトが当初掲げていた課題のうち、『文書』作成の動機と、記載内容の選択の意味、伝来の経路の解明、「封建制」「封建領主-農奴」など所領分析の既存概念を超える概念、方法論の開発、ビザンツ、日本との同種文書事例との比較考察といった課題についても、さらなる検討を必要とする。しかし、これらの課題は性急に結論づけるものではなく、つねに念頭におきながら、地道な研究を積み重ねて提示すべきものであろう。本プロジェクトを通じてそのための手掛かりが得られたことを確認して結びとする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

(1) 福島知己、R. A. Sayce 「1530年-1800年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」の検討(1)、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読なし、35号、2015、104-140

(2) 金尾健美、アンジュー地方ラ・ソーレイ村地代帳の読解—ロブリエール家文書の解明に向けて、川村学園女子大学研究紀要、査読なし、26巻1号、2015、29-53

(3) 大月康弘、(書評)井上浩一・根津由喜夫編「ビザンツ 交流と共生の千年帝国」、西洋史学、査読あり、No.254、2014、64-66

(4) 大月康弘、中世キリスト教世界と「ローマ」理念—リウトブランド『コンスタンティノープル使節記』における「ローマ」言説、甚野尚志・踊共二編『中近世ヨーロッパの宗教と政治』ミネルヴァ書房(図書所収論文)、査読なし、2014、19-42

(5) 福島知己、1775年に出版されたネケール『立法と穀物取引について』の諸版について、一橋大学社会科学古典資料センター年報、査読なし、34号、2014、61-72

(6) 大月康弘、ギリシャ文化とコンスタンティノープル、数学文化、査読あり、20号、2013、28-40

(7) 大月康弘、後期ローマ帝国における財政規律と法の変容、西洋中世研究、査読あり、5号、2013、69-85

(8) 堀越宏一、タピスリーを愛した人びと—中世フランス貴族の衣食住、芸術新潮、

査読なし、2013年5月号、2013、62-67

(9) 堀越宏一、(書評)城戸毅著『百年戦争-中世末期の英仏関係』、史学雑誌、査読なし、第121編第10号、2012、100-108

(10) 堀越宏一、騎士と武士の比較史、歴史と地理(世界史の研究)、査読なし、No. 656、2012、56-59

(11) Yasuhiro OTSUKI、Pioneer of Byzantine Studies in Japan: Late Prof. Kin-ichi Watanabe's Works、Mediterranean World、査読なし、XXI、2012、295-300

(12) 大月康弘、ビザンツ人の終末論—古代末期における世界年代記と同時代認識、甚野尚志・益田朋幸編『中世の時間意識』知泉書館(図書所収論文)、査読なし、2012、5-25

〔学会発表〕(計8件)

(1) 森村敏己、制度の政治思想史—安藤裕介『商業・専制・世論—フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』(2014)を読む—、第39回社会思想史学会大会、明治大学(東京都・千代田区)、2014年10月25日

(2) Koichi YAMAZAKI、Du modèle à suivre au modèle à comparer – Recherches sur la Révolution française au Japon après le bicentenaire、国際シンポジウム L'historiographie de la Révolution française 25 ans après le bicentenaire de 1989 (Commission internationale de l'Histoire de la Révolution française 主催)、フランス革命博物館(ヴィジュー、フランス)、2014年9月5日

(3) Yasuhiro OTSUKI、Byzantine Christian Attitudes towards Disasters in 6th Century: To Reconsider the Reign of Justinian I、一橋大学地中海研究会国際ワークショップ、ムハンマド5世大学社会経済研究所(ラバト、モロッコ)、2014年9月4日

(4) 福島知己、一橋大学社会科学古典資料センターによる所蔵資料の電子化公開、ワークショップ「貴重資料の電子化アーカイブとその公開・利用・外部連携: Digital Humanitiesの新局面」、一橋大学社会科学古典資料センター(東京都・国立市)、2014年8月26日

(5) Yasuhiro OTSUKI、Civil Donations and Christian Philanthropy in the Later Roman Empire: Some Analysis of Justinian Edicts on Donations to the Ecclesiastical Institutions、Fourth World Congress for Middle East Studies (WOCMES)、中東工科大

学(アンカラ、トルコ共和国)、2014年8月22日

(6) 森村敏己、ヴァンデ: 風化を拒む過去、「歴史と人間」研究会、現代史研究会共催シンポジウム、一橋大学(東京都・国立市)、2013年12月15日

(7) 山崎耕一、フランス革命の起源と開始をめぐって、日仏歴史学会第4回研究大会、関西学院大学(兵庫県・西宮市)、2013年3月28日

(8) 堀越宏一、ヨーロッパにおける歴史観から見た「断絶」と「新生」、慶応義塾大学言語文化研究所公募研究「断絶」と「新生」公開シンポジウム「断絶を超えて 前近代のキリスト教世界とイスラーム世界における多様な試み」(招待講演)、慶応義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)、2012年12月1日

〔図書〕(計2件)

(1) 河原温、堀越宏一、河出書房新社、図説・中世ヨーロッパの暮らし、2015、127

(2) 堀越宏一、甚野尚志編著、ミネルヴァ書房、15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史、2013、376(pp.83-104, 254-272)

〔その他〕

一橋大学社会科学古典資料センターホームページ

Digital Library of the Archives of the Marquisate of Laubrières

<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/laubrieres>

Koichi YAMAZAKI、On the Burt Franklin Library and the archives of the Marquisate of Laubrières

<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/laubrieres/index.html>

Koichi HORIKOSHI、Les archives de la famille Le Febvre de Laubrière à la bibliothèque de l'Université de Hitotsubashi

<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/laubrieres/essay.html>

貴重書コレクション 「ロブリエール家文書」

<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/collection/franklin/book04.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大月 康弘(OTSUKI, Yasuhiro)
一橋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 70223873

(2) 研究分担者

堀越 宏一(HORIKOSHI, Koichi)
早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号: 20255194

金尾 健美(KANAO, Takemi)
川村学園女子大学・文学部・教授
研究者番号: 20286173

森村 敏己(MORIMURA, Toshimi)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号: 40230148

山崎 耕一(YAMAZAKI, Koichi)
一橋大学・社会科学古典資料センター・特任教授
研究者番号: 70134872

福島 知己(FUKUSHIMA, Tomomi)
一橋大学・社会科学古典資料センター・助手
研究者番号: 30377064

床井 啓太郎(TOKOI, Keitaro)
一橋大学・社会科学古典資料センター・助手
研究者番号: 20508650

(3) 連携研究者

池 享(IKE, Susumu)
一橋大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 20134885